

持続可能な養鶏を追求する

— 価値と魅力の再発見 —

田辺 竜太（採卵鶏経営・山梨県忍野村）

地域の概況

本経営が所在する富士・東部地域は、首都圏に近い立地条件と夏季の冷涼な気候・清涼な湧水等の自然条件に恵まれており、高原野菜をはじめ酪農や花き等、特色ある農業経営が行われている。

また、地域内には比較的規模が大きい養鶏経営が営まれており、県内の鶏卵供給地として、その役割を担っている。

忍野村は、標高約940mに位置し、避暑地として古くから親しまれ、毎年多くの観光客が訪れる。稲作のほか、スイートコーンなどの生産が盛んである。

経営・活動の推移

3代目経営者である竜太氏は就農以前、スポーツ業界に身を置いており、実家の採卵鶏経営を継承する予定ではなく、それは2代目経営者であった良一氏も同じ考えであった。

良一氏が平成28年8月に急逝した後、顧客や近所の方々から「養鶏場を続けてほしい」という声を受け、父の養鶏場が地域の人々から愛されていたことを改めて感じ、氏は経営継承を決意した。

同年12月に勤めていた会社を退職し、29年1月に就農開始、令和元年に当代表を務めていた母親の幸子氏から事業継承することと



(写真1) 経営主（田辺竜太氏）

なった。

しかし、良一氏の経営時は継承する予定ではなかったため、鶏舎の老朽化、飼養規模の不足、販路の新規開拓、売掛金の累積など、問題は山積していた。

収益性を改善するため、経費削減、飼養規模の最適化など、経営の刷新を図った。そのうちの1つである平飼いへの転換が収益性向上の一因となった。

東京で開催されたマルシェに自身の生産物を出品した際、消費者から「この卵は平飼いか?」「餌はどのようなものか?」等の経営に対する具体的な質問を受け、消費者の食品安全に対する意識が想像より高いことに驚くとともに、大規模経営に対して価格競争で対峙せずとも、消費者の需要にあった高付加価値化を行うことで鶏卵の個性化が図れるのではないかと考えたことが、一部平飼いへの転換

(表1) 経営の推移

年次	作目構成	飼養羽数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和45年	採卵鶏	10羽	2坪	竜太氏祖父（良氏）が忍野村内野で養鶏を開始
昭和52年	採卵鶏	4,000羽⇒36,000羽	1,600坪	竜太氏父（良一氏）が経営継承
平成29年	採卵鶏	12,000羽	1,600坪	竜太氏が経営継承
令和元年	採卵鶏			母親の実家（空き家）をリノベーションし、「たまご食堂」開店
令和4年	採卵鶏	15,000羽	1,600坪	旧ケージ鶏舎を平飼い鶏舎にリノベーション 平飼い集卵装置の導入 平飼いを開始 クラウドファンディングを立ち上げ、平飼いの規模拡大を図る
令和5年	採卵鶏			やまなしアニマルウエルフェア認証を取得 パルシステムとの販売契約

(表2) 経営実績（令和5年度）

経営概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)	家族・構成員	2.4人
		雇用・従業員	8.1人
	採卵鶏平均飼養羽数		13,000羽
	年間鶏卵生産量		255,500kg
	年間鶏卵出荷量		230,000kg
収益性	所得率		16.1%
	採卵鶏100羽当たり売上原価		698,329円
生産性	採卵鶏100羽当たり年間鶏卵生産量		1,965.4kg
	採卵鶏100羽1日当たり産卵量		5.4kg
	鶏卵1kg当たり平均販売価格		470.0
		GP	200.0円
	産直	570.0円	
	直販割合		50.0%
	採卵鶏100羽1日当たり飼料消費量		11.0kg
	飼料要求率	農場	-
		採卵鶏	-
	育成率（初生雛）		-%
	育成率（中大雛）		-%
	採卵鶏淘汰率		0.05%
	採卵鶏へい死率		0.05%
	採卵鶏補充率		-%
鶏舎1m ² 当たり年間鶏卵生産量		71.0kg	
鶏舎1m ² 当たり採卵鶏飼養羽数		3.60羽	

を図るきっかけとなった。

当時、県内で平飼いに先駆的に取り組んでいた農場があり、自ら訪ねた。

その農場が積極的に取り組んでいたアニマルウエルフェアの考え方に感銘を受け、現場で直接生産手法を学び、販売先についても紹

介を受けることができた。

また、当時空き家となっていた実家を「たまご食堂」として週末限定で、規格外の卵等を加工して提供、自社のPRや地域イベントを開催するなど、経営において多くの役割を果たしている。

また、アニマルウエルフェアの考え方や、自身の経営に対する姿勢を多くの人たちに知っていただくため、令和4年の11月-12月にクラウドファンディングを立ち上げた。返礼対応として、田辺養鶏場の卵と五味醤油（甲府市）が開発した麴醤油を使った卵かけご飯を自宅で味わえるコース、養鶏場の見学、「たまご食堂」の卵料理を味わえる体験コースを設けたところ、全国から159名の支援者が参加し、466%の達成率と、目標を大きく上回る多くの方々から共感を得ることができた。

経営・技術の特色等

経営継承時は採卵鶏を約24,000羽飼養していたが、一部平飼いへシフトしたことで現在は14,800羽の飼養となっており、4分の1が平飼い、4分の3がケージ飼いとなっている。

夏場は鶏舎横のスペースでネットを設置の上放飼も実施しているが、鳥インフルエンザの発生を防ぐために、防疫上リスクの高い時

期には放飼せず、鶏舎内での平飼いに留めるほか、飼養衛生管理基準を順守し、従業員全員での衛生管理を徹底している。

飼料に関しては、先代からの餌づくりに対するこだわりを継承し、カキ殻や海藻粉末を加えた安全で質の高い飼料を、成長過程に合わせてメーカーで配合し給与している。また、パルシステム生活協同組合連合会と販売契約を締結するにあたり、国産飼料10%以上配合の規定があることから、国産米や地元忍野村の事業者から排出される大豆かすを活用するなど、地域資源を有効活用したエコフィードに取り組んだ。現在、卵質をより向上させるため、エコフィードの利用については一時休止し、ワイン粕、ホップ粕など、利用の誘引がある未利用資源の配合を検討している。また、現在の経営主となってから一部平飼いへ転向したことにより、新たな販売先開拓とアニマルウェルフェア飼養の高付加価値化を実現した。

【先進機器の導入】

平飼いにシフトするにあたり、国内では先進的な平飼い集卵装置（ベンコマチック社自動集卵ネストシステム）を県の機械導入補助事業を活用し導入、効率的な平飼い飼養を実施している。

平飼いをを行うリスクの1つに圧死が挙げら

れるが、これは鶏が驚くとスペースの隅に集まる習性があり、先に隅へ集まった鶏が後から来た鶏につぶされるものである。田辺養鶏場ではこのリスクを分散するため、ネットで飼養スペースを細分化することで隅を多く作り、圧死のリスクを軽減している。平飼いを始めるにあたっては、圧死に加え、巢外卵の発生、産卵率低下、販売先開拓、疾病など多くの懸念があったが、技術提供いただいた経営のサポートもあり、可能な限り自然に近いレイアウトを心がけ、現在平飼いによる大きな問題はない。

【省力・低コスト化】

本来、平飼いはケージ飼養と比べ手間がかかるが、効率的な機器を導入したことにより、むしろ大幅な省力化を実現している。一部ケージ飼養だったものを平飼いへ転換したことで、ワクモの発生が抑制され、薬剤費が削減された。

また、本来売り物にするのが難しい卵（ヒビ卵など）を自社の食堂で利用することで、収益増加の取り組みを実施している。

【高品質化】

山梨県で設立した「やまなしアニマルウェルフェア認証」で星3つの認証を受けており、その基準に準じた飼養により、鶏へのストレスを軽減するよう心がけている。またNON

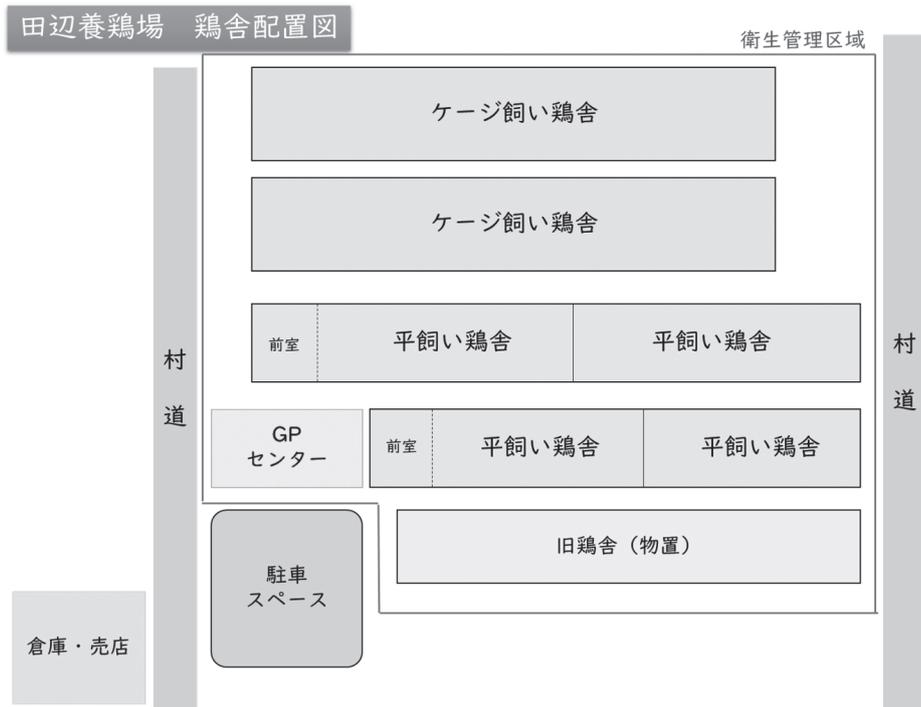


(写真2) 鶏舎外観



(写真3) 平飼い放牧卵

(図1) 鶏舎配置図



—GMOの飼料、富士山の伏流水を与える事により、高付加価値化の取り組みを実施している。

【環境保全の取り組み】

鶏ふんは、地域養鶏場との共同堆肥場（忍野村）で堆肥処理され、地域特産のスイートコーン等を栽培する地元の耕種農家に還元している。

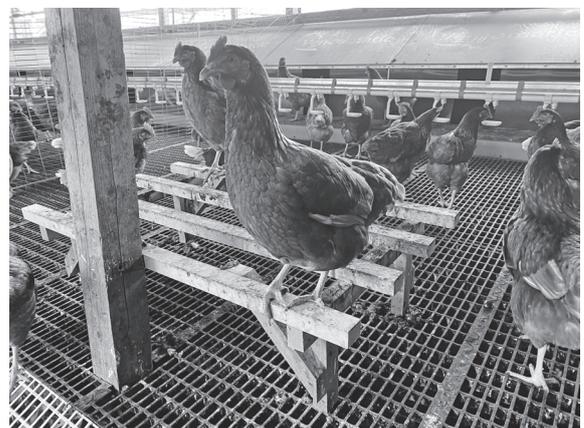
地域に対する貢献

【地域ブランドの創生】

忍野村は富士山の伏流水が湧水とする、忍野八海に代表される水に恵まれた村であり、氏は豊富な自然、おいしい水、美しい富士山こそがブランド力であると考えている。このブランドに、こだわりの飼料とアニマルウェルフェアの考え方を取り入れた、鶏にとって快適な飼育環境を組み合わせることで、さらなるブランド価値を構築することを目指している。

堆肥は前述の通り、地域からの苦情等もなく、円満に処理を行っている。一方で平飼い鶏舎の敷料として戻し堆肥を使用しているが、鶏ふんの高温処理とそこに含まれる放線菌が臭気を抑制していると考えている。

忍野村は財政的には豊かだが、限定的な財源に依存している状態であり、独自の財源を村としても創生したいと考えている。本経営の卵はふるさと納税の返礼品として採用され、「忍野の卵」として扱われており、村の



(写真4) 鶏舎内の様子



(写真5) 放餌の様子



(写真6) たまご食堂外観

返礼品ランキング2位となっている。氏は、自身の経営のみならず、忍野村の発展にも重きを置いており、村の伸びしろは観光事業と地域物産にあると考えていることから、ふるさと納税にも今後さらに注力していきたいと考えている。

【地域雇用・食育等への貢献】

本経営は6次産業化を進めるにあたり、地域労働力を積極的に活用し、生産から販売まで本経営における幅広い分野で活躍している。

また、氏自身がスポーツの世界に身を置いていた経験から、食の重要性を強く認識している。そのため、地域の方々に対しても食の重要性を考える場を提供したいと考え、地元のサッカー指導者として活動すると共に、「たまご食堂」で子供から大人まで参加する料理教室を開催している。また、年に3回、東京

からシェフを招聘して「Coccoマルシェ」を開催し、カルボナーラやプリンなど、養鶏場の卵をふんだんに使った料理の試食を通じ、消費者に食の安全・安心や食の大切さについて考える場を提供している。

【地域農業及び経済への貢献】

地元耕種農家に対し別経営と合同で製造している堆肥を提供し持続可能な地域農業の確立に努めている。

また、地域企業から国産飼料及びエコフィードの供給及び加工について協力をいただき、共存共栄の原則で良好な関係を築き、地域経済に貢献している。

女性の活躍・働きやすい 職場環境づくりの取り組み

氏の母親をはじめとして、従業員の半数が女性であり、ワークライフバランスを優先に考え、フレキシブルな勤務時間の提案等を行い、女性にとって働きやすい環境づくりにも配慮している。

このことが長期雇用、離職率の低減につながっていると考えている。

家族に対してもおよそ時給2,000円を目安に給料を支払い、シフト制にすることで業務の偏りを避けるようにしている。また、従業員同士の交流を目的として、有志で定期的に懇親会(仕事後の飲み会など)を開催している。

将来の方向性

現経営者である竜太氏が就農してから6年が経過した。当初は多くの課題に直面していたが、「持続可能性」をキーワードに経営を大きく変革し、地元で愛される農場へと成長した。今後の経営計画として、以下の4つの柱を中心に、地域に根差した優良経営を目指す。



(写真7) たまご食堂を訪れるお客さん



(写真8) たまご食堂で提供される食事

【アニマルウエルフェアを始めとする「持続可能性」への配慮】

氏の農場では、アニマルウエルフェアを重視し、鶏たちがストレスなく健康に過ごせる環境を整えている。これにより、消費者に対して「誰にでも見せられる農場」を実現し、透明性の高い経営を行っている。今後も持続可能な農業を追求し、環境負荷を最小限に抑えた生産方法を導入していく。

【卵の持つポテンシャルを活かしたさらなる6次化への試み】

農場で生産される卵の品質を最大限に活かし、加工品や新商品の開発に力を入れている。これにより、付加価値の高い製品を提供し、消費者の多様なニーズに応えることを目指し、農場の収益を向上させる取り組みを進めている。

【志を同じくする平飼養鶏への普及・支援活動】

平飼養鶏の普及と支援活動にも積極的に取り組んでいる。氏は、自身の経験を活かし、他の農家と協力して平飼養鶏の技術や知識を共有し、地域全体の農業の質を向上させることを目指している。これにより、持続可能な農業の普及と地域の農業コミュニティの発展に貢献している。

【忍野村の発展に貢献できる地域振興活動】

地域社会との連携を強化し、忍野村の発展に寄与する活動を展開している。地元のイベントや教育プログラムに参加し、農業の魅力を発信することで、地域の活性化を図っている。また、地元の特産品を活かした商品開発や観光資源としての農場の活用など、地域経済の発展にも寄与する取り組みを進めている。

これらの取り組みを通じて、氏の農場は地域に根差した優良経営を実現し、持続可能な未来を築いていく。